「山月記」の魅力

山下真史

本稿は、二〇二〇年三月一日、富山県の高志（こし）の国（くに）文学館において「中島敦文学の魅力」という題で講演した内容の一部を元に、加筆修正したものである。拙稿「「山月記」を読む」（「中央大学文学部紀要　言語・文学・文化」一二一号、二〇一八年二月）の補足として読んでいただければ幸いである。

今日は、高志の国文学館の方からの依頼もありましたので、「中島敦文学の魅力」という題でお話しすることにしました。前半は有名な「山月記」を取り上げます。

もっとも、私はこういう題で論文を書こうとか、講演しようと思ったことはありません。この「中島敦文学の魅力」という題は、研究論文の題としてはまずあり得ないもので、研究者としてこの題で講演することも、依頼でない限り考えないでしょう。どういうことかと言いますと、研究者は対象を客観的に分析するのが仕事でして、書かれたものとして存在している文学作品は研究対象になりうるわけですが、文学の「魅力」というのは存在していると言えるかどうか分からないもので、研究対象とはなりえないからです。たとえば、雪が降るとか、あいの風が吹くという現象は、自然科学の研究対象になりうるわけですが、雪や風の「魅力」というのは研究対象になりえないのと同じです。ですので、私は研究者としては中島敦についてできるだけ客観的に語ってきたつもりですが、「魅力」について語ったことはありませんし、そういうことをしていいのかな、という気もするんですね。

実は文学作品の「魅力」を語ることを仕事とする人は別にいて、文芸評論家というのが、それに当たります。一昔前だと中村光夫とか、江藤淳とか、有名な人がいましたね。作家でも創作のかたわら、そういう仕事をする人もいますね。三島由紀夫などはずいぶん作家について書いていましたし、池澤夏樹なども評論家としての仕事

が結構あります。作家を含めた文芸評論家は、ある作品にどういう魅力があるかを語るのが主な仕事です。古典の作品でも、今に通じる魅力とか、逆に今の時代にない魅力とかを説明して、現代の人々に作品を紹介していくのが仕事でしょう。ですので、「中島敦文学の魅力」というのは、研究者が話すことじゃない、ということになるわけです。もっとも、では、私が中島敦の文学に魅力を感じていないかと言えば、そんなことはなくて、おそらく人一倍魅力を感じていて、一番魅力について語れる人間だと思っています。ただ、それを直接話すことはしないというのが、研究者のたしなみなんです。自制が働くと言いますか……。ですが、だんだん歳をとってくると、そういう自制心が効かなくなってきて、まあいいか、というような気にもなってきました。ですので、今日は半分、研究者という立場を離れて、評論家的な話もするということで、お許しいただければと思います。

中島敦の文学の魅力についてお話しする前に、人間・中島敦の魅力にもちょっとだけ触れておきます。中島敦は、子供の時から成績優秀で、大変頭のいい人ですし、文章は難しい漢字が多くて、取っつきにくいというか、気難しそうな人にも思えますが、結構ユーモアのある人です。また、子供思いの人でもあって、南洋庁の役人としてパラオに行ったときに、八歳と一歳の息子さんに宛てて、絵はがきを毎日のように出しています。封書も含めて、全部で八一通が現存していて、神奈川近代文学館に保管されています。私は、去年、この南洋から息子さんに宛てた絵はがきと、息子さんから敦に出した手紙をオールカラーで収録して、解説を付けた本を出しました。『中島敦の絵はがき』という題で、神奈川近代文学館で販売しています。こういうのを読みますと、子供への愛情あふれる中島敦を知ることが出来ます。私の友人には、この絵はがきを読んで中島敦はこんな人だったんだと見直したという人もいますし、中には涙したという人もいるくらいで、敦の人間的な魅力が窺われます。絵はがきは原寸大で収録してありますので、活字にしてしまうと分からなくなってしまう敦の心遣いなどが感じ取れるでしょう。こういうのをお読みいただくと人間的な魅力を知ることができると思います。

一　「山月記」の評価

さて、本題に移りましょう。「山月記」は、すでにお読みの方も多いと思いますので、ストーリーを紹介するのは割愛させていただいて、最初に当時の評価についてお話しします。この作品は、中島敦の文壇デビューとなったもので、「文学界」という雑誌の昭和一七年二月号

に「文字禍」とともに掲載されました。「古譚」という総題の元に、二つの作品が同時に掲載されましたので、その当時の評価は、どっちの作品について言っているのかわからないところもありますが、それらを見てみましょう。

一番早い文芸時評は、雑誌「三田文学」の昭和一七年三月号の無署名ものです。

> 中島敦の「古譚」は、近頃のがさつな文壇には珍らしい理智的な作品であつて、それだけ目立つて見える。しつかりしたねれた筆致で気品があり、悪ふざけでない面白さを持つてゐた。

この評者は、「理智的」とか「気品」とかいう言葉で評しています。今風に言えば、格調の高い文章というような意味でしょう。

また、敦の東大時代の少し後輩に当たる中村光夫は「子供と芸術家と夢」(「日本図書新聞」昭和一七年五月一一日)で、次のように述べています。

> その文章には今日の青年作家に稀に見る一種蒼勁と形容したいほどの簡潔な落着きがあり、それが題材の古めかしさと巧まずに調和して「古譚」の魅力の大半はここに基づくと思はれたが、この二つの短篇を貫く作者の人生観めいた思想はこれと反対に殆ど子供つぽいといへるほど若々しく、このいはば技巧の老成と心情の稚気の奇妙な結合が、作者が独自の夢を織る原動力であり(略)

中村は、文章が老成している一方、小説から窺える思想は子供っぽく、その結合が魅力だと言っています。褒めているのか貶しているのか、ちょっと曖昧な書き方ですね。

もう一つ、見ておきましょう。昭和一七年上半期の芥川賞の選評(「文藝春秋」昭和一七年九月)です。中島敦の「光と風と夢」は候補作の一つでしたが、この回は該当者なしとなりました。その時の選評に、「古譚」に触れているものがあります。選考委員の瀧井孝作は「衒学的なくさ味があつてどうも好きにはなれなかつた」と述べています。小島政二郎は「これはなかなか面白い。しかし、芥川賞に推薦する程の「小説」ではない。」と述べています。また、宇野浩二は「細工がありすぎる」と言い、「題材は変つてゐるけれど、書き方は、凝つてゐるやうで、下手である」と述べています。宇野浩二はどの作家に対してもだいたいいつも辛辣なんですけど……。でも、私に言わせれば、宇野浩二のだらだらした文章よ

り中島敦の方が上手だと思いますけどね。

それはともかくも、こういう評価を見ますと、「山月記」は発表当時はさほど高く評価されなかったことが窺えます。しかし、中村光夫の評に見られるように、文章の魅力は当時から評価されていたようです。

二　表現の魅力

ところで、一般に文学作品の魅力というのは、どういうところにあるのか、と考えるに、大きく二つに分けて考えることができるでしょう。一つは内容、一つは表現です。内容はストーリーの展開の仕方や主題の掘り下げ方などで、表現は言葉の選択や一つ一つの文の書き方です。厳密に言えば、内容と表現は分けられないとも言えるのですが、ここでは分けて考えることにしましょう。芝居で言えば、ストーリーが内容、役者の演技も含めた舞台が表現に当たると考えれば、わかりやすいでしょうか。歌舞伎は、新作歌舞伎を別にすれば、ストーリーに魅力を感じて観に行く人は少ないわけで、歌舞伎の魅力はほとんど、役者にかかっていると言ってもいいでしょう。

私は、小説の善し悪しは、実は、内容より表現の善し悪しの方が大きいと思っているのですが、では、具体的にどこがどう優れているのか、というのは難しい問題です。内容的にはほとんど変わらないのに、表現が優れているというのはどういうことか、と聞かれると、それは感じることだ、と答えるしかないかもしれません。一文の長さとか、漢語と和語の割合とか、数値化することも出来ますが、数値化したところで、その良さや感銘の理由を説明できるわけではありません。表現の善し悪しというのは、客観化して説明できないことなのです。ですので、研究者としてはそういうことについては話しづらいのですが、今回はあえて表現についてお話ししてみましょう。

ちょうど「山月記」の「現代語訳」というような本が最近出ましたので、それを参考にしてお話ししたいと思います。その本というのは、二〇一九年三月一五日に角川つばさ文庫から出た本で、『山月記・李陵』という題です。奥付には「中島敦／作、Tobi／絵」と書いてあって、その一頁前には、「この作品は、新字・新かなづかいを採用した角川文庫版『李陵・山月記』（昭和43年9月刊）をもとにし、漢字にふりがなをふり、一部読みやすいように表現を書きかえたり、改行や読点を増やしました。」という注記があります。本来は誰が書きかえたのかを明記すべきだと思いますが、それ以上の注記はありません。編集部でやったということなんでしょうが、中島敦は、著作権が切れているから、勝手にやったんで

しょう。ただ、表現を書きかえるというのは大変なことで、これだけ変えた上に、おかしな書きかえもあるとなると、中島敦は「オレはこんなもの、書いてない」と怒りそうです。その意味では、大いに問題がある出版だと思います。ま、それは措いておきますが……。

実はこれを紹介するのは、表現の魅力を考える上でちょうどいい材料を提供してくれると思ったからです。現代語訳と比較することで、表現の魅力が見えてくると思うからです。まずは、「山月記」の冒頭から見ていきましょう。

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。

「山月記」の引用部分の漢字は新字体に変えていますが、この箇所、角川つばさ文庫では次のようになっています。ルビは省略しました。

中国の隴西という地方にいた李徴は、学問が得意で、才能と知恵にあふれており、天宝の末年、若くして官吏の試験に合格し、江南尉という役職を任された。

しかし、ひとりよがりな性格で、自尊心も高く、この地位で納得することを良しとしなかった。

一文ごとに改行し、総ルビになっていますが、この「現代語訳」は変なところが沢山あります。「性、狷介、自ら恃む所頗る厚く」というところの「狷介」は「ひとりよがり」と直してますが、ここは「頑固」くらいが適当でしょう。また、「自尊心も高く」となっていますが、「頗る」は訳し忘れたようです。ま、この手のおかしな箇所は、他にも沢山ありますが、それをあげつらってると切りがないのでやめておきます。さて、この文章を参考にしながら、敦の文章の特徴を見てみましょう。

「隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、」のところですが、つばさ文庫よりもう少し原文に近く現代語風に直すと「隴西の李徴は博学才穎で、天宝の末年に、若くして名を虎榜に連ねて、ついで江南尉に補せられたが、性格は狷介で、自ら恃むところが頗る厚く」というふうになるでしょう。「で」「に」「て」「は」「が」などの助詞を付けると現代風の文章に近くなると思います。ただ、文の印象としては、ちょっと間延びした感じになるでしょう。逆に言えば、敦は、

助詞を省いて、漢文訓読風にして、文章を引き締めている、歯切れを良くしているということです。

「山月記」冒頭は、こういう硬質な文章で、難しそうという印象を与えますが、話が進むにつれて、次第に漢語が多めというくらいの普通の文章に近くなります。

袁傪は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久濶を叙した。そして、何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の声が答へて言ふ。自分は今や異類の身となつてゐる。どうして、おめ〳〵と故人の前にあさましい姿をさらせようか。且つ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決つてゐるからだ。しかし、今、図らずも故人に遇ふことを得て、愧赧（きたん）の念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭はず、曾て君の友李徴であつた此の自分と話を交して呉れないだらうか。

ここは角川つばさ文庫では次のようになっています。

袁傪は恐怖を忘れ、馬から下りて草むらに近づき、懐かしげに久しぶりの再会を喜んだ。

そして、なぜ草むらから出てこないのか、とたずねた。

李徴の声が答える。

「自分は今や獣の姿になっている。

どうして、恥ずかし気もなく、かつての友人の前に、みじめな姿を見せられるだろうか。

さらに、自分が姿を現せば、必ず君に恐怖心を起こさせるに決まっている。

しかし、今、偶然にもかつての友に会う機会を得て、恥の気持ちをも忘れるほどに懐かしい。

どうか、ほんのしばらくでいいから、私のみにくい今の外形を気にせず、かつて君の友・李徴であった、この自分と話してくれないだろうか。」

冒頭部分に比べると、書き換えた部分はだいぶ減っていますね。「久濶を叙し」とか「異類」とか、「畏怖嫌厭の情」、「愧赧の念」とかを置き換えているくらいです。敦の文章がやや難解な漢語があるくらいで、普通の文章に近いということでしょう。

そのあと、李徴が袁傪に嘆きを語る部分は、ほとんど普通の言葉遣いです。

それを思ふと、己は今も胸を灼かれるやうな悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。た

とへ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作つたにした所で、どういふ手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？　己は堪らなくなる。

こんな風な表現で、全く難解ではないです。つばさ文庫でもほとんど変更していません。

ところが、語り手の語る部分は、後半でも引き締った表現が続きます。

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げてゐた。

格好良い一文ですが、つばさ文庫では「わずかな月の光は冷たく、白い露が地につもり、木々の間をふく冷風は、すでに夜明けが近いことを告げていた」となっています。こうなると文章の緊張感が台無しという感じですね。

ちなみに、この小説は、李徴の独白が中心になっていますが、途中に情景描写が入ります。「漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて、何処からか、暁角が哀しげに響き始めた」とか、今、引用した「時に、残月、光冷やかに」とか、最後の「虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思ふと、又、元の叢に踊り入つて、再び其の姿を見なかつた」という文章は、極めて印象的です。情景描写の冴えもこの作品の魅力でしょう。

こうしてみますと、「山月記」の文章は、漢語の硬い響きを多用する引き締まって歯切れのいい表現と、やや多いくらいの表現と、普通の表現とを巧みに組み合わせていることが分かります。漢語は、抽象的な概念を表すことが多く、情緒的な表現にはあまり向かないので、センチメンタルで、湿っぽい独白の部分は、漢語を減らし、その周りは漢語で包んで、格好良く見せているのでしょう。表現上の工夫はこういう所にあって、こういうメリハリが魅力を生み出しているのだと思います。

ついでに少し寄り道して、「李陵・司馬遷」の書きかえも見ておきましょう。この作品は従来「李陵」と呼ばれていたものです。実はこの題は「日本百名山」で戦後有名になった深田久彌がつけたものです。この作品は、生前、活字にされず、敦が亡くなった後、奥さんが原稿を深田に預けたものです。深田は、原稿に題名がついてなかったので、仮に「李陵」と付けて、昭和一八年七月に「文学界」に発表しました。以後、その名前で呼ばれてきたのですが、中島敦の遺したメモには、作品の題の

いくつかの候補が書かれています。第三創作集として、昭和一八年に中央公論社から出版する本に収める予定の作品リストのメモを見ると、「莫北悲歌」も候補だったのが分かりますが、線で消してあるので、「李陵・司馬遷」にしようと考えていたことが分かります。実は、この作品は、草稿をどういう風に活字に起こすかという問題もあり、これまで数度にわたり新しい本文が作られてきましたが、二〇一二年に村田秀明さんと私で、校訂をやり直しました。その方針は、中島敦がもし生きていたらどういう風に活字にしていたか、ということを考えて校訂するというもので、誤記を直し、かなで書いてある所を敦の書き癖に従って漢字に直したり、言葉を決めかねて二つ書いてある所などを吟味し直しました。要するに、敦の意図をできるだけ汲んで、本文を作ることにしたわけです。そのときに、題も同時に中島敦が最終的に考えていたものを選びました。また、その後、この作品の注釈も村田さんと一緒に五年かけてやり、二〇一八年に本にまとめました。小説のある部分が何を元に書かれているか、元の話とどう違っているかなどを、詳細に注釈しています。一般の人にも読めるように注釈し、中島敦が参考にしたものも収録していますので、興味のある方は読んでみてください。

この「李陵・司馬遷」の冒頭の表現を見てみましょう。

漢の武帝の天漢二年秋九月、騎都尉李陵は歩卒五千を率ゐ、辺塞遮虜鄣を発して北へ向つた。阿爾泰山脈の東南端が戈壁沙漠に没せんとするあたりの磽确たる丘陵地帯を縫つて北行すること三十日。朔風は戎衣を吹いて寒く、如何にも万里孤軍来るの感が深い。漠北・浚稽山の麓に到つて軍は漸く止営した。

硬い響きの漢語が、リズムよく繰り出され、緊張感のある素晴らしい文章になっていると思います。七音と五音の繰り返しも感じられますし、「感が深い」と現在形を混ぜて、臨場感を出しています。一方、角川つばさ文庫の方は次のようになっています。

漢の武帝の時代、天漢二年の秋、九月に、騎都尉という位の李陵は、五千の歩兵を連れて、遮虜鄣を出発して、北へ向かった。

アルタイ山脈の東南の端、ゴビ砂漠にうもれてしまいそうな小石の多い丘を通って、北へ行くこと三十日。

北風は服の上から吹きつけてとても寒く、遠くまで、大きな軍を引き連れてはるばるやってきたなあ、という気持ちにさせられる。

ゴビ砂漠の北、浚稽山という山のふもとにつき、軍はようやく歩みを止めた。

訳としてもおかしなところがありますし、これだと、なんだか緊張感ゼロののんきな行軍みたいに感じられますね。文章が違うとこれほどの違いになるというのが感じられると思います。

三　作品の典拠

さて、「山月記」の話に戻りましょう。この作品の典拠は、よく知られているように李景亮撰「人虎伝」です。国民文庫刊行会編『国訳漢文大成　晋唐小説　文学部第一二巻』(大正九年一二月)に収録されています。「人虎伝」にはいくつか異本がありますが、「山月記」に出てくる漢詩は、李景亮撰の「人虎伝」にのみ載っています。あらすじは以下のようです。

隴西の李徴は、博学で文才があり、若くして官吏登用試験に合格した。性格は倨傲で、人付き合いが悪く、仲間に嫌われ、うつうつとして楽しまなかった。そこで、人との交わりを断ったが、貧窮したので、衣食のために地方の役人になった。ある程度蓄財できたところで、李徴は故郷に帰ることにしたが、如墳の宿で病気になって発狂し、従者を鞭打った。十日ほどすると病がますますひどくなり、とうとうある夜、走り出してどこかに行ってしまった。

翌年、李徴の友人の袁傪は、商於を通ったとき、虎となった李徴と出会った。李徴は袁傪に「自分は病気になって発狂し、虎になって、人を喰うようになった。恥ずかしくて姿を見せられない。妻子に自分は死んだとだけ伝え、生活に困らないようにして欲しい。それから、自分には以前作った詩があるのでそれを是非後世に伝えたい」と言って、詩を朗唱し、さらに即興の詩を披露した。

袁傪が何か後悔していることはないかと聞くと、李徴は「以前、ある未亡人と関係したところ、その家の者に殺されそうになり、逢えなくなった。そこで家に火を付けて、一家みな殺した。そのことが悔やまれる」と答えた。

李徴は、袁傪に帰りに同じ場所を通らないようにと言い、妻子のことを再度頼んで別れた。袁傪が丘の上に着いたとき、草むらの方を見ると、虎が躍り出て咆哮した。

後日、袁傪は李徴の妻子に手紙を送って葬儀のための財貨を与えた。すると、李徴の子が訪ねて来て、袁傪はやむなく詳細を告げた。その後、袁傪は李徴の妻子に自分の給料を分け与え、自身は出世した。

「人虎伝」と「山月記」は大まかな筋立ては同じですが、細部は結構違っています。まず、「山月記」に採用されなかった箇所を見てみましょう。

一つめは、食べ物の話です。「人虎伝」には、李徴が虎になった後で、飢えに耐えかねて、婦人を襲って食べてしまったところ、とても美味しく、記念にかんざしが取ってあるという話が出てきますが、これは採用されませんでした。また、「人虎伝」には、袁傪が李徴に馬が一頭余っているからそれを食用に提供しようと申し出て、李徴と押し問答になる場面もあります。李徴が友の乗り物の馬を食べるのは、その友を食べるのと同じだと言って断ると、袁傪は、じゃ、羊の肉を置いていく、と言う場面があるのですが、これも採用されていません。リアルすぎてこの小説には合わないと考えたのでしょう。

二つめは、李徴が虎になった理由として思い当たることがないか、と聞かれて、以前、火を着けて一家を皆殺しにしてしまったことがあると話す場面です。「人虎伝」は、このような悪行の結果、虎になったという因果応報の話となっているのですが、敦は「山月記」をそのような物語にするわけにはいかないと考えたのでしょう。その他、袁傪が都に戻ってからの後日談も採用されていません。ここは蛇足めくと考えたのでしょう。

次に、話の順番を入れ替えている所を見ておきます。「人虎伝」では、まず、家族の生活の世話をしてほしいと頼み、次に詩の伝録を頼んでいますが、「山月記」では、順序を逆にし、先に詩の伝録を頼み、別れ際に家族の世話を頼んでいます。「山月記」ではそのように改変し、李徴に「本当は、先ず、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら。飢ゑ凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男だから、こんな獣に身を堕すのだ。」と言わせています。

そもそも「人虎伝」の李徴は、詩人になりたいと考えていた訳でないことも考え合わせると、中島敦は、「山月記」を詩人になりたかったのになれなかったという点に焦点を絞って書こうとしていることがわかります。

また、よく言われることですが、「山月記」には「月」の描写が出てきて、印象的です。「人虎伝」には「月」は一回も出て来ませんが、「山月記」には、「残月の光をたよりに」、「時に、残月、光冷やかに」、「白く光を失つた月を仰いで」とあり、「己は昨夕も、彼処で月に向つて咆えた」という表現も数えれば、四回出てきます。李徴の独白の合間に風景描写を挟むことで、時間の経過を知らせるとともに、場面を印象深くさせています。特に最後の「白く月を失った月を仰いで」という描写は叙情

的でもあり、小説の感銘を深めています。

ちなみに、中島敦は、月や星(特にシリウス、中国名では天狼星)に関心があったようです。先ほどの「李陵・司馬遷」には「月が山の峡から覗いて谷間に堆い屍を照らした。(略)月光と満地の霜とで片岡の斜面は水に濡れたやうに見えた」という表現がありますし、他にも「虎狩」や「光と風と夢」など、様々な作品に月や星の印象的な描写があります。

四　作品の主眼

「山月記」の内容の読解については、すでに「「山月記」を読む」にまとめてありますので、繰り返しませんが、要点だけを言えば、この作品は、詩人を志した青年が、その志が実現できなくなり、決定的に挫折したときに、どんなことを思うか、友達にどう嘆くか、ということを、そのナルシシズムも含めてリアルに描いた作品と言えます。虎に変身してしまうというフィクションを借りて、絶望の淵に落とされた青年の嘆きがリアルに描かれているわけです。このような挫折の物語は、「詩人になりたい」というところを別の何かへの夢、――ミュージシャンになりたいとか俳優になりたいとか、あるいは、あの人の恋人になりたいという願い――に置き換えれば、若者には共感できる物語になるでしょう。この作品の主眼は挫折の嘆きを語ることにあるんだと思います。もちろん、嘆いてどうなるものでもないのですが、嘆きとか悲しみとかの負の感情を表現することは、文学のみならず、芸術のもっとも得意とするところですから、「山月記」もその系列の作品だと言えるでしょう。

この小説は、そういう狙いで書かれたもので、中島敦はリアルに読まれることを考えていなかったと思います。寓意小説として書いたものだと言えるでしょう。しかし、意外なことに、リアルに読もうとする人がそれなりにいるようで、李徴は本当は虎になっていないのではないか、虎になったら顎や喉の声帯の形からして人の言葉がしゃべれるはずはないのだから、というようなことを言う人もいます。私は、そんなことを考えても何か生産的な議論が出来るのかな、という気がします。漱石の「吾輩は猫である」を読んで、小説が書ける猫がいるのかと考える人はいないと思いますが、それと似たようなことです。

また、仮に李徴は「人喰虎」になったとリアルに考えると、非常に奇妙な小説になります。李徴は人を何人も食ったはずなのに、袁傪に頼んだのは自分の詩のことや家族のことで、食った人の菩提を弔ってくれとか、その人の家族を探し出して世話してくれ、なんてことは一言も言わないわけで、それこそ非人間的です。また、リアルに読めば袁傪も問題です。李徴が「最早、別れを告げ

ねばならぬ」と言うと、袁傪は「叢に向つて、懇ろに別れの言葉を述べ」て別れてしまうのですが、監察御史なら「いや、ちょっと待ってくれ。君の苦しみはよく分かったが、人喰虎をこのまま見逃すわけには行かぬ。悪いが神妙にお縄を受けてくれ。」とでも言うべきだったのではないでしょうか。友達だからと言って、殺人犯を逃したのは役人として問題だ、というような批判もできそうです。しかし、繰り返して言えば、そもそもこの小説はそういう風にリアルに読まれることを前提としていない小説なのです。

「山月記」はリアルに読めば、支離滅裂な小説になってしまうのですが、実は、そういうことを考えさせないようにしているのが、この小説の文章の力なんでしょう。漢語が多く配されて、引き締まった文章の力で、読者は小説の主眼である李徴の嘆きに惹きつけられ、袁傪らと同じように「事の奇異を忘れ、粛然として、この詩人の薄倖を嘆じ」るのです。

最後に「山月記」の魅力はどこにあるのか、ということですが、内容的な面で言えば、何かになりたいという夢をもって、挫折を経験したことのある人には、李徴の嘆きが切々と心に響いて、その切なさの表現が魅力だということになるでしょう。ただ、是非とも何かになりたいとか思わなくなった人には、こういう青年の嘆きは共感を呼ばないかも知れません。詩人にはなれなかったけど、立派な虎になれたんだからいいんじゃない？　と思ったり、自分の志通りにならないなんてことはよくあることで、世の中そんなに甘くない、「下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈する」のが嫌だと言ったって、そういう我慢をしないとどの世界でも大成しないんじゃない？　とか思って、李徴にあまり同情しないかもしれません。たしかに、「山月記」は、若者向きの小説と言えるわけで、人によっては魅力を感じないということもあるでしょう。

私はどうか、と言うと、実は、「山月記」は中島敦の小説の中では、さほど魅力を感じるものではありません。私は「李陵・司馬遷」は最高傑作だと思っていますが、それに比べると、この小説は内容的にあまり惹かれないのです。ただ、ともすればぐだぐだになりがちな青年の嘆きを硬質な文章で、格好良く書いてみせた点には魅力を感じます。文章の格好良さに一番惹かれます。青年の嘆き自体は、この時代も、あるいは今もそんなに変わらないものですが、こういう文章で書いたのは類例を見ないわけで、そこにこの作品の魅力があると言えるでしょう。まあ、そうは言っても、最初にお話ししたように、魅力というのは客観的に説明できないものですから、説

得力はないかも知れませんが。

（やました　まさふみ　本学教授）